

日本における島嶼研究の系譜から石原俊の小笠原群島研究を考える Ishihara Shun's Ogasawara archipelago research seen from the perspective of the genealogy of the islands studies in Japan

高江洲 昌哉

TAKAESU MASAYA

神奈川大学外国語学部

Kanagawa University, Faculty of Foreign Languages

キーワード

島嶼研究 小笠原群島 日本の島嶼 石原俊 系譜的考察

Keywords

Island Studies; Ogasawara Archipelago; Islands of Japan; Ishihara Shun; Genealogical Studies

Quadrante, No.21 (2019), pp. 7-22.

目次

はじめに

1. 島嶼研究の軌跡
2. 2000年代の社会の中に石原の仕事位置付けて考える
3. 先行、同時期の研究の中から石原の仕事を考える
4. 石原の小笠原研究の軌跡

まとめ—どのように石原の成果を活用するか—

付表：島嶼研究文献目録

はじめに

まずは、今回の企画に至った目的の背景を述べつつ、「島嶼を考える／島嶼から考える」という視座の歴史的展開について述べていきたい。キーワード的に島嶼への視座を整理すると、「孤島苦」のように“閉鎖された空間”として評価するのか、それとも、海とセットで議論するように“開放的空間”として評価するのか、そうした視角の違いがあり、それがどのように揺れ動いてきたのかと、まとめることができよう。

本稿のもとになった2017年12月の書評会で、筆者は基調報告の役割を担い、島嶼研究の中で石原俊の研究¹を確認するというものであった。石原

の研究を一読した者ならわかると思うが、石原の研究を紹介するなら欧米の研究も押さえて整理する必要もある。とはいえ、能力の問題もあり、タイトルに「日本における」と限定をつけ、なおかつ、1990年以降の日本語文献の議論の中で石原の研究を位置付ける内容で組み立てることにした。

弁明方々もう一言弁明を付け加えたい。それは「なぜ、1990年以降なのか」という点である。そのため次に、1990年を開始年としたことの説明をしていきたい。もっとも、ここで注意しておきたいのは、島嶼に注目した重要な研究成果が、1990年前後に突然湧出したわけではないということである。強いて言えば、マイナースポットから、メジャーポイントに移っていく時期という意味である。つまり、島嶼研究以外の者から、「自分達とは関係ない」という特殊例外的な扱いから、「自分達にも必要とされるようなヒントがある」という外部からの評価の質的転換が起きたという意味の、1つの便宜的な区分として使っている（確かにひとりに比べれば、島嶼へのマイナー視は減ったかもしれないが、島嶼の視座がメジャースポットであると衆目の一致する見解かと言え、いささか疑問が残る）²。

¹ 詳しくは、明治学院大学のHPにある教員情報を参照の事。

<https://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?kyoinId=ynd>

egegeggy

² この点、沖縄戦後史を様々な群島の視点から研究している黒柳保則が同世代の沖縄研究者から「沖縄群島は基地間



8 日本における島嶼研究の系譜から石原俊の小笠原群島研究を考える

ところで、この間の日本における人文研究の軌跡を確認するために 1996 年に発表された鹿野政直の「化生する歴史学」のある記述を取り上げてみたい。鹿野は「歴史をみるうえでの「文化」への視点の傾斜と国民国家論に挟撃されて、近代「国家」は足早に遠ざかりつつある」（『化生する歴史学』、42 頁）と述べながら、石川啄木の永井荷風批判「(国家は…引用者挿入) そんなに軽い問題であらうか？」を引用して、そこから「歴史学は、内側から『国家』『国民』を超える視点を準備することにより初めて、未来へ連なることができるだろう」（43 頁）と、安易な克服感を戒める文章でまとめている。鹿野の文章を再読すると、国民国家批判の隆盛に身を寄せて、乗り越えたかのように見えた国家の拘束力に対して、その規定の強さを指摘するものであった。戦時期に少国民であったが故の、身構えといえる。現時点における国家やナショナリズムがもたらす問題群を前にして、その身構えた思考の必要性を痛感する。もちろん、国民国家批判、ポストコロニアリズムで議論された成果が“意味のなかった流行りモノ”という評価ではない。また、あの時期の成果が無謬ではないと弁護するものでもない。あの時の成果と課題を確認しつつ現在に活かす意味を問い直すことは無駄なことではないと考えるし、時代の雰囲気も確認したいと思い、まず始めに紹介したものである。

さて、今回の企画は、石原の小笠原研究を手掛かりにしながら、我々の知的枠組みを再検証しようとする試みである。石原の仕事を一言で言えば、現代社会を批判的に把握する知的営為といえる。そのため、ここからの内容は、石原の議論の軌跡と可能性を措定するために、ここ 30 年近くの日本語文献と対話をしながら確認をしていきたい。

まず、現在の石原の取り組みである大学論ともかかわる人文学の危機といわれる社会状況についてだが、社会が危機であるがゆえに、“落ち着いて実証”という言い方もできる。もう一方で（石原の

議論とも関連するが）学問世界自体が危機にさらされているときに、こうした実証という方法論に閉じこもることが許されるのかという受け止め方もある。こうした両極の意見に耳を傾け、つらつら考えると、社会の要望に応えるために、「精緻な実証」だけではなく、自分たちのやっている作業がどのような意味を有しているのか、対外発信と練り直しを両立させながら考えていこうというのが私の立場である。

また、これから述べる議論の手がかりとして、直近の出来事である今回の書評会の参加者のうち 3 人（高江洲、石原、長島）が関わることになった 2017 年 5 月に開催された歴史学研究会大会近代史部会の報告を紹介したいと思う³。石原はこの時に、硫黄島を事例にして、体制に翻弄されながらも、「生き続ける人たち」への注目という内容の報告をおこなっている。大きな枠組みとそこに生きる人たちを紹介することで、私達に「忘れていけない人たち」の存在を通して、社会認識の再確認をはかることを目的とする報告をしていた。このことを前提にして、過去の「島嶼」研究の系譜から石原の小笠原群島研究の意義と可能性について考えていきたい。

1. 島嶼研究の軌跡

それでは、資料(1)の年表風にまとめたブックリスト（本稿末の付表）を手掛かりに、島嶼研究の軌跡と特徴を述べていきたい。2000 年代の初頭には、具体例として岩波書店を中心とした作品になるが『海のアジア』（全 6 巻）、『アジア新世紀』（全 8 巻）、『いくつもの日本』（全 7 巻）というシリーズ本が刊行されている。これらは網野善彦の「単一民族批判」や海への関心につらなる思考、アジアの海でいえば鶴見良行の仕事などともつながるものである。また、現実社会ではアジアの経済発展ともつながる形でこれら作品が上梓されたといえよう⁴。もっとも、こうした開放性がありながらも

題とつながってくるからそれ以外の地域を研究しても得点にならないのではないかと指摘されたことを述べ、「運動」と「研究」が分かちがたく結びつき、それ以外のものが評価されにくくなった「沖縄群島史の重要性は認めますが、やはりそれだけでは不十分ではないでしょうか」（『対話 沖縄の戦後』、吉田書店、2017 年、241-242 頁）と述べていることは、「島嶼から考える」という本企画において

引き付けて考えるべき内容であるし、黒柳のこの指摘は、本報告のまとめの部分に結びつく。

³ この成果は、『歴史学研究』増刊号として 2017 年 10 月に刊行されている。

⁴ 停滞するアジアから躍動するアジア、アジアの人たちの「主体性」が全面に出てきたといえる。確かにアジアの経済発展やそこに寄与した「主体性」はあるだろうが、鶴見

2000年代は、同時期に9・11同時テロが起こり、国内的に小泉改革がはじまり、2000年代中ごろには格差社会と呼ばれるような現象が耳目を集める様になっている（2007年にはネットカフェ難民という言葉が生まれ、翌年の6月には秋葉原の通り魔事件が起き、9月にはリーマンショックが起きている）。また、アジアとのつながりでいえば、デフレの中での経済競争や領土問題、外国人参政権問題など中国・韓国を中心にしたアジア観の悪化も無視できないようになってきた。

もちろん、資料(1)掲載の諸作品をみていくと、単純に時代が反動化したというよりも、寛容と不寛容のせめぎあい、時代との緊張関係が見て取れる。「最良の引き倒し」かもしれないが、石原が登場した歴史学研究会（以下、歴研と略記）の近代史部会の視角、同じく歴研の全体会・共通テーマが「境界領域をめぐる不条理」となっているように、微力かもしれないが、時代への抗いが起きていることも無視できない。資料(1)の2017年に記載した『大原社会問題研究所雑誌』の特集主旨でも『境界』に発動する支配—被支配関係の暴力・収奪」と述べ、暴力を前景化しているように、ここ最近では、境界のポジティブな側面よりも、葛藤を前景化し、そこから解決を目指していこうとする動きが顕著になったといえる。

よって、安易な楽観も禁物だが、無用に悲観せず、自身のフィールドから打開策を模索する必要があるのかもしれない。その他、歴史をやっている者から一言いえば、時代は単色ではないので、時代の多元性を読み取り、「より良いものを目指す」感度を磨き続ける必要がある。そのためには「何を研究し、どのように表現するか」という研究への向き合い方を内省する必要があると考えるので、本企画もそうした手掛かりにしたいと考えている。

が注目した「格差」の問題は遠景化したといえる（もっとも事態がより複雑化したといえよう）。

⁵ 日本史を含めた前近代海域史の成果として『海域アジア史研究入門』（岩波書店、2008年）がある。その後のフォローである山内晋次「東アジア海域論」（『岩波講座 日本歴史 20 地域論』、2014年）も前近代海域論である。この山内論文を含む岩波講座『地域論』は李成市の序論副題が「境界・接触領域・交流」というように日本列島内部ではなく「つなぐ」、「開く」地域に注目している（島嶼では今泉裕美子「太平洋の『地域』形成と日本」が収録されている）。

もちろん、こうした自己の心構えだけでなく、研究成果を安心して公表するためにも、「表現の自由」を尊重する社会の寛容度についても絶えず注視する必要はある。

それと、本稿では十分取り上げていないが、日本で“島嶼から考える”という思考を振り返った場合、無視できないのは、宮本常一や鶴見良行の仕事である。実際、著作集や特集、関連本の刊行を考えると、彼らの仕事は過去のものではなく、現在に至るまで、その遺産は若手を魅了しながら再活性化されてきたという現実を押さえる必要もある。

次に日本史で島嶼と考えた場合、海域と結びついて前近代史が強く、一国史を相対化する海域史という作業が重要になる。ただ、海域と島嶼は近い関係にあるが、海域史が港湾都市も主要なフィールドとしているように、同義語というわけではない⁵。日本・前近代・島嶼で見た場合、国民国家批判やグローバリズムとの親和性が強いといえる。それでは日本列島からもう少し視野を広げて、まず北の方に行くと、北方領土問題という領土問題として注目されてきたが、樺太アイヌにも注目するようにロシア・日本の角逐だけでなく、その中で「主体的」に生きる姿が描かれるようになった⁶。ここ30年という本稿の時期限定からすると前史的な位置づけになるが、1985年に起きたアイヌ肖像権問題がある⁷。その他、告発的抵抗史という文体ではない『辺境から眺める』（テッサ・モーリス＝鈴木、2000年）も貴重な成果になる。こうしたアイヌを主語にした研究以外では、石原の硫黄島の議論と重なる終戦時の樺太への言及というものもある。もっとも、そこには日本の戦時の責任に対する告発とナショナリズムの回収のせめぎあいがみられる⁸。台湾（も島嶼と見做した場合）に

⁶ 例えば、「主体」的役割について、トコンベ逃亡事件に対する先行研究の評価を「受動的な主体性」とし、より「自発的・自律的な行動」を確認しようとした東俊佑『『トコンベ一件』再考』（『北東アジアにおける帝国と地域社会』、北海道大学出版会、2017年）がある。アイヌなどマイノリティ研究の成果と課題については檜皮瑞樹「マイノリティ研究と『民衆史研究』」（『日韓民衆史研究の最前線』、有志舎、2016年）などを参照のこと。

⁷ 肖像権から大学所蔵人骨問題に至る経緯を確認する必要がある。

⁸ 新井佐和子『サハリンの韓国人はなぜ帰れなかったのか』

10 日本における島嶼研究の系譜から石原俊の小笠原群島研究を考える

目配りすると、アイヌ研究と重なるが原住民研究などから、学知批判、アイデンティティ、表象や自己決定などの議論を確認することができる。

また、東南アジア島嶼部、カリブ海、太平洋諸島などの研究をみると、近代再考、国民国家のように近代社会を価値基準として見る思考の再考、大国主導の冷戦秩序に対する視座の再考のように既知の視角を学び直す場所になってきたといってもよいであろう⁹。

こうした流れを踏まえて、島嶼研究の成果をまとめると、一人の人間が一つの視座に固定された形で思考するのではなく、複眼的に思考することの必要性を認知させたことが、島嶼研究も含めた人文学研究の成果だと思う。また、こうした複眼的思考の廃棄（軽視）が強まったというのが現状認識といえるだろう（思いやりが称賛される一方で、「愛情」という名の暴力のように「相手の為の優しさ」が「自分の行為を自明の前提とする優しさ」に転化する DV 的状況を想起すれば、その危険性は十分であろう）。先ほど述べたように「島嶼から考える」という視座は、このように「複眼的思考」の成果が「なぜ市民的教養として現在必要なのか」そのことを確認させる領域と、まとめることができよう。

マイノリティ研究や境界研究は、「複眼的思考」や「自己決定権」という成果をもたらしたが、「自己決定権」の強調が自分の考え／立場を固定化させるように「複眼的思考」攻撃の鬼っ子になっているのではないかと考える。もっともこの点は、後述するように単純な反動ではないというのが、報告者の見立てである。

先ほどの資料(1)はいろいろと議論の種を見つけることができるが、ここで2、3の成果を確認すると、例えば『太平洋島嶼地域における国際秩序の変容と再構築』（2016年）という本では、「太平洋諸島地域をめぐる新たな国際関係の外観、すなわち周辺ドナー国を中心とした国際社会からの働きかけの拡大と、その動きに対する島嶼諸国の反応という、両者の間の相互作用関係」（39頁）と、国

際関係の秩序問題では、ついつい大国の動きを中心に考察しがちになるが、「両者の間の相互作用」というように、「両者」、「相互」と島嶼側の動きを客体化せずに、当事者の視点を加味していることに留意したい。

次に、ほぼ同時期（2015年）に出版された南洋に関する2冊の新書から、島嶼に対する視角を確認したい。1つは帯に「貴重な証言で甦る『日本統治時代』の実像」と書かれた荒井利子の『日本を愛した植民地——南洋パラオの真実——』（新潮新書）であり、もう1つは「このような日本人として耳に心地よくない証言もしっかりと受け止め、未来への教訓にできるかどうか。そこで日本国民の民度が試される。…語り継いでいかなければ、南洋群島の数奇な歴史と悲劇はいつしか『なかったこと』になりかねない。南洋の島々を再び『忘れられた島々』にしてはならない」（230頁）とまとめた井上亮『忘れられた島々——「南洋群島」の現代史』（平凡社新書）がある。もちろん、歴史への向き合い方は“1つの正解しかない”というわけではないので、その長短を見極める必要がある。よって両者とも過去を振り返り、未来に活かすという気持ちは同じであろうが、自身の持つ日本認識が他者観（距離感）に投影されていることは、両書を一読すると確認できる。もう少し補足すると、自身と南洋との向き合い方が、実は自身と日本との距離感（どの程度、相対的に眺めているかということ）で、ナショナル・アイデンティティの呪縛性からの距離感と言い換えてもよからう）をも測定しているといえる。これら2冊の特徴も、戦時・戦後の小笠原（硫黄島）を取り上げる石原の仕事を確認する際の参照枠になろう。

2. 2000年代の社会の中に石原の仕事位置付けて考える

『近代日本と小笠原諸島』刊行後の2010年代の社会／研究の中から石原の小笠原研究の展開を確認したい。まず、ガラパゴスと関連して、2011年の毎日新聞記事の新年の特集座談会が「ガラパゴ

（草思社、1998年、のち2016年に文庫化）の議論の立て方は、後述の南洋諸島の問題と併せて考える必要があろう。⁹ 一例として岩波書店で2000～2001年に刊行されたシリーズ本『海のアジア』全6巻をあげたい。この本の内容として「新しい発想でボーダレス時代のアジアを考えよう」

という一文がある。本報告も含め冷戦「終結後」の世界をグローバリズムという言葉で理解しがちであるが、「ボーダレス」という言葉が一世を風靡していたことも確かである。「ボーダレス／グローバリズム」の使用例も検証する必要があろう。

スな日本の私」というタイトルで閉塞社会と閉塞的な「私」を議論しているように、「ガラパゴス」というものが、社会を分析する1つのキーワードであったことが確認できる。

また、先ほど「単純な反動ではない」と述べたが、拙稿「近代日本の「文化統合」と周辺地域」(『大原社会問題研究所雑誌』679号、2015年、35頁)で引用した、李建志『朝鮮近代文学とナショナリズム』(作品社、2007年)で記述されているエピソードは、カルチュラルスタディーズが流行った頃の知的風潮(たかだか10年ほど前だが、断絶された印象をもつ風景)を描いたものだが、そこには寛容の中に自己中心的な思考——現在の問題点——が胚胎されていたことが見て取れる。

このように閉塞的／自己中心的な閉じた社会認識があり、石原の研究もこのような認識への批判的介入ということになる。例えば、今回の企画ではとりあげていないが、石原の2010年に刊行した『殺すこと／殺されることへの感度』という時評集にも注目したい¹⁰。何故、この本を取り上げたのかと言うと、私が今回の企画で強調したいのが、「他者性の回復／複眼的思考の回復」であるとするならば、このタイトルが示す「殺すこと／殺されること」というタイトルには、自分がする／相手にされるといふ複眼的な行為が示されている。それだけでなく、そこには他者の視点も介在している。また「感度」という言葉が示すように、そこには自己完結した「閉鎖」した感性を拒否する姿勢も読み取れる。石原の主張をこのようにまとめるならば、「ガラパゴス」批判は、こうした感度の低減への危惧であることは言を俟たない。石原の時評や、毎日新聞の座談、李の著書のエピソードから推察すると、丁度この頃を潮目に、社会全般で他者性を組み込んだ視座が軽視されてゆき、ガラパゴスと呼ばれるような、自己の視座とそれに付随する価値観に固執する思考が社会的に強まってきたといえる。

この点を踏まえて、少し議論を整理すると、閉

じた思考、閉じた自己認識を問い直すことが、時代の課題と言い換えることが出来る。先述した「ガラパゴス」のように、そこには、分かりやすさ、自己了解できるモノ(もしくは自身が希望する自己像)以外を受け入れない風潮(外部からの異議申し立て／内部にある異なるモノへの拒否というように過剰防御反応が頻出している社会)がある。単なる社会認識ではなく、自己認識においても多様な自己から、都合の良い自己像を選び出し、それを否定するものを排除しようとする自己愛的攻撃性、そうした風潮への危機意識(漠然とした不安)があるのではないだろうか¹¹。

3. 先行、同時期の研究の中から石原の仕事を考える

以上、時代のなかで石原の研究を位置付けてみたが、ここでは、小笠原研究から石原の作品を位置付けてみたい。これまでの小笠原研究は、小熊良一(『歴史の語る小笠原島』(1966年)、『千島小笠原島史考』(1969年)、安岡昭男(『明治維新と領土問題』(1980年)、田中弘之『幕末の小笠原』(1997年)などをあげることができよう。これら作品から確認できるように、よく見られるアプローチは、幕末期を対象にした、領土画定のサクセスストーリーといえよう。そうした中、石原のアプローチは、日本人の物語に回収されない、「接触領域」として小笠原の歴史を組み立てたものといえる。または、忘却された(または客体、遠景化された「欧米系の人)に焦点をあてた作業と評価することもできる。

次に島嶼を対象にした作品ではないが、そのアプローチ方法を比較／架橋することで、本企画のキーワード(グローバリズム、帝国、主権)の広がり確認できる作品を紹介したい。阿部純一郎『〈移動〉と〈比較〉の日本帝国史』(新曜社、2014年)と塩出浩之『越境者の政治史』(名古屋大学出版会、2015年)も「移動」に注目し、それが政治空間にどのような影響を与えたのかを議論した著作である¹²。これら著作のうち塩出は「近代日本

¹⁰ 本書は2009年に『週間読書人』で執筆した論壇時評を加筆・修正のうえ東信堂より出版したものである。もっとも、本企画と関連する、「いつまで矛盾を押しつけるのか——沖繩そして硫黄諸島の歴史性／現在性——」(6月)という文章も収録されている。

¹¹ 私はこのことについて「自己認識の幅が他者認識を規制

する」というテーマで授業をやったことがある。

¹² 阿部は帝国に力点を置いて「日本帝国史の再構成」(6頁)を試み、塩出は国民国家に比重を置いて、しかしながら完成された完結した政治空間とみなさず、政治主体としての「移動民」に注目することで、「日本という国家、およびアジア太平洋地域の政治秩序といかなる関係を持ったかを

を『国民国家』と規定するにせよ、『植民地帝国』と規定するにせよ」(3頁)と、議論の関係上、国民国家／植民地帝国については副次的に取り上げた印象を与えるまとめかたをしている¹³。もちろん取り上げる対象の違い、力点の置き方の違いかもしれないが、一方で石原は、「世界市場・主権国家・国民国家といった近代的な秩序」、「帝国、総力戦体制、冷戦体制に翻弄されながら」(『群島と大学』、12頁)と述べて、空間認識を重要視して、議論を展開している。こうした「秩序」と「体制」という言葉には、社会を包摂する「位相」¹⁴をどのように提示するかという問題とつながってくる。つまり、時代とセットになった重層的な地域像を議論することは、今回の企画においても大事な点である。この点(時代とセットになった重層的な地域像)は、議論の前提として共有されているものなのか、それとも、議論の対象として論争していかなければならないものなのか、近現代のアジア・太平洋地域を考える上で、この点は1つの論点になると思う。

また、移動といっても様々な移動があるので、材料の違いによって、「移動」という同じキーワードを使いながらも描かれた時代—世界像がどのように違ってくるのかという問題がみえてくる。

4. 石原の小笠原研究の軌跡

石原最初の単著である『近代日本と小笠原諸島』(平凡社、2007年)は接触領域、海賊、欧米系日本人に注目することで、グローバリズム研究の一翼として位置付けることが可能な作品といえる。

『(群島)の歴史社会学』(弘文堂、2013年)も通史的な叙述になっているので、近代初頭に力点が置かれた『近代日本と小笠原諸島』と戦後・現状批判に力点を置いた『群島と大学』の中間にあたる作業だといえる。『(群島)の歴史社会学』で戦時・戦後にあたるのが、第3章「帝国の〈はけ口〉と〈捨て石〉—入植地から戦場へ」(以下、石原A)、と第4章「冷戦の〈要石〉と〈捨て石〉」である。

タイトルでおおよその意図は確認できるが、ここでは〈捨て石〉に注目して考えていきたいと思う。特に第3章にも組み込まれている、同年に刊行された『戦争社会学の構想』(勉誠出版、2013年)所収の「帝国と冷戦の〈捨て石〉にされた島々—戦場から基地化・難民化へ」(以下、石原Bとする)の成果も併せて考えていきたい。石原Bには、先述の秩序、体制をもう少し具体化させる文章がある。屋嘉比収の指摘を踏まえる形で、冷戦秩序を「不平等に配置された空間、すなわち戦場／占領／復興という状況が相互に関連しつつ共時的に存在している空間であった。…すなわち『戦後』の東アジア・西太平洋は、戦場／占領…／復興という状況が相互に関連しつつ共生する、植民地主義—冷戦型空間であったといわねばならない」(石原B、333～334頁)と述べている。この時系列的に変化していく空間—「かつてジャパン・グラウンドと呼ばれた小笠原諸島を中心とする北西太平洋の島々」—の特色を、石原Aは「開発のターゲット」「日本の侵略／進出の〈飛び石〉」、「日本の総力戦の〈捨て石〉」と、端的なキーワードを使用して、その時系列的な特徴を述べている(石原A、145頁)。

小笠原の歴史的展開を空間的に把握すると、日米の角逐が段階的に起きた空間となり、戦前期は「ジャパン・グラウンド」(第3章)と表現され、戦後は「アメリカの湖」(第4章)と表現されている。このように、影響を与えた国名を変えることで、その質的变化を端的に表現している。もっとも、このように変転極まる小笠原の歴史を説明したとしても、多くの日本人にとって、他者的な場所かもしれない。そこで、改めて石原Bを引き寄せてみると、直近の福島原発事故を踏まえて、「〈アメリカの湖〉の矛盾を集中的に押しつけられてきた間太平洋の島々が長らく経験してきた、被曝や放射能汚染とのたたかいが想起される契機ともなった」(石原B、334頁)という一文が目にとまる。こうした、福島原発事故を契機に小笠原に対する理解の感度が高まるであろうと期待しているが、

問う」(3頁)ことを目的としている。

¹³ もっともこのように整理すると、塩出の研究意義を見失うおそれがあるので、少し補足したい。『越境者の政治史』の終章において「近代を通じて、国民国家が規範的単位を超える実在となったことは実際にはなかった」(422頁)というように国民国家の過度の規範性を相対化するところ

に塩出の研究意義がある(この点に関して、『歴史学研究』962号に掲載された前田亮介『全国政治の始動』への書評も参照)。石原の視点、塩出の視点を架橋しながら、近代における「境界」や「越境」の問題を議論する必要がある。 ¹⁴ 位相という表現が適切かどうか分からないので、この用語表現についても議論ができればと考える。

それは「戦争を〈いま・ここ〉に遍在する経験として思考すること。そうした思考を目指すのでなければ、わたしたちがあえて戦争社会学を名乗ることに意味はないだろう」（石原 B、334 頁）と、呼びかけで終えるのも必然的な帰結として了解できる。つまり、自己完結した孤高の小笠原研究があるのではなく、社会認識のリトマス試験紙的な場所として小笠原研究が存在していると示すことで、「小笠原を知ること」の意味を研究者／読者に呼び掛けをしているともいえよう。さらに、この呼びかけ部分に注目し、やや強引な結び付けかもしれないが、引用文中の「戦争社会学」を「島嶼から考える」に置き換え、「遍在」に対する感知力が麻痺した感覚を「ガラパゴス型思考」と見做せば、石原の思考に注目し、「島嶼から考える」という視座を広く活用しようという本企画の意図が理解できるであろう。

そして最近刊行された『群島と大学』（共和国、2017年）であるが、この本は時評的な作品であり、（石原を知らない人だと）タイトルを一目見ただけでは、そのつながりが直ぐには了解できないものになっている。群島に関しては、以下のような構成¹⁵になっている。

第2部 群島という現場

—帝国・総力戦・冷戦の底辺から

- 一 世界史のなかの小笠原群島
- 二 硫黄島、戦後零年

小笠原の近現代を「帝国・総力戦・冷戦」で貫徹したといえるし、これまでの成果をコンパクトにまとめたという評価も可能であろう。だが、『近代日本と小笠原諸島』では幕末に重点が置かれていたが、近著では現代の方に時代関心の重点度が移り、対象地域も小笠原諸島から、その中の硫黄島へというように、より焦点が絞ってきたという特

徴がある。さらに、社会学という大きな枠組みと、歴史経験として個人に焦点を当てており、歴史社会学の見事な融合を読み取ることができる。

先ほど、「一見すると、つながりが分からない」といった『群島と大学』であるが、群島とはグローバリズム等による矛盾のしわ寄せの場所の象徴であり、大学はグローバリズムの中で満身創痕になる場所といえる。よって、石原にとって、群島も大学も対象ではなく、「自らの場所≒抵抗の拠点」としての「群島、大学」といえる。こうした石原の頭の中に結び付いている、ガラパゴス脱却の知というものを、広く議論してみようというのが、今回の企画ではないだろうか

まとめ—どのように石原の成果を活用するか—

今日を「右傾化」とか「保守化」という言葉でくることが一般的になっているが、私は「国権化」¹⁶（安全保障や健康など生活を軸に国家への依存、目線が一致してくるという意味で使用）という言葉が適切ではないかと考えている。これまでは、国家と市民とを二分法的に考えてきたが、市民の中で統治側と親和性を持つ思考もある以上、市民の多様性を考慮する必要があるだろう。それだけでなく、国家と一致した視座だけで良いのかどうか、そうした点に漠然とした不安を持つ人、または、国家と一致した視点を持つことに疑問を持ったことがない人達に届く言葉を探すことも必要になる。こうした点からも石原の仕事議論する今日的意味はあると考える。

また、勝手なイメージかもしれないが、年表から確認できるように東南アジア島嶼域などは、国民国家を再考するフィールド、一国史的視座に固まった思考を解毒する場所だと認識していた。しかしちょうど年表の最後、現在では、フィリピンで大統領への高い支持率にみられる、ミンダナオ島への戒厳令の問題、テロをどう考えるかという

¹⁵ ちなみに、第1部が時評的な文章、第3部が「大学の現場」ということで、グローバリズムの中で「満身創痕」になった大学の現場を報告した文章、第4部が書評という構成になっている。

¹⁶ この点に関して筆者は、2017年10月13日に「神奈川大学 憲法を考える会」で「憲法と島と私たち」という報告で一部関連する内容を述べたことがある。

また、「周辺」への対応で考えれば、「国権の救済」という思考方法をどのように評価するかという問題になる。日本

史でも国民主義者として知られている笹森儀助は、日清戦争直前の沖縄探検の成果を記した『南嶋探検』で、民衆の塗炭の苦しみやその原因として旧慣温存政策を批判しており民力休養を提言している。もう一方で、日清戦争直前という社会風潮を反映して八重山の国防充実は唱えており、国防充実と民力休養を両立した形での提言である。果たして、現在の私たちは、こうした思考から脱却できたのか否か、再考する必要はあろう。

問題もでてきた。軽々しくは言えないが、テロ対策とは「国家統合と多様性」への問題提起といえよう。そうすると、緩やかな統合は幻想なのか、それとも強権支持の背後にもやはり「緩やかな統合社会」が現実として存在しているのかどうか、フィリピン研究者が同席しているので、意見を聞きつつ議論できることを望んでいる。それとあわせて、国内と国外で「強権性」への評価が違うのであるならば、フィリピンの人たちはどのような気持ちで「国家統合」に付き合い／向きあっているのであろうか、はなはだ悩むところもあるので、こうした点も議論をしていけたらと考えている¹⁷。

この点は“島嶼を理想化することなく、島嶼の現実をみつ”という研究姿勢になるであろう。また、島嶼研究の成果として「他者性の内在化」というものを置いていたが、それでは、この「他者性の内在化」という視点は、島嶼の現実を考察するうえでどのような問題を有しているのか、この思考の可能性と限界を考えるためにも、石原の仕事を手掛かりに議論ができればと考えている。

【付記】

最後に個人的な思い出を書いておきたい。学部生時代に留学生と交流するサークルに入っていた。その時、東南アジアからの留学生の「将来、国を背負う」という気持ちに接することもままあった。当時ちくま学芸文庫として発行されたばかりであった竹内好『日本とアジア』を偶然手にとり、時代背景の違い（中国革命を高く評価する竹内とポスト天安門事件の時代を生きる私）がありながらも、

¹⁷ この部分は当日も述べた部分である。ある意味で唐突、もしくはフィリピン研究の芹澤隆道へのリップサービスの感もあるような発言であるが、著者なりの思いがあって記した箇所でもある（あわせて、付記も参照のこと）。備忘録程度に私情を記せば、鶴見良行の熱心な読者ではないが、それなりに読んでいたところ、『現代アジア論の名著』（中央公論社、1992年）に鶴見の『ナマコの眼』が取り上げられていた。名著と銘打つ本に採録されているので、肯定的紹介であると思ったところ、紹介者の山影進は「アジアには、国家に押しつぶされた人々もいたが、文化間の差異を利用し、国境の存在を利用するしたたかな人々も存在していたのである。今日の国際社会の中で、普通の人々にとって国家はたしかに重たい。しかしいたずらに国家の悪の側面を論じ、普通の人々を国家から切り離して無菌培養しようと

近代や日本とアジアとの関係を厳しく問いかける竹内の文体に惹かれ、熱心に読んでいたこともあり、留学生の姿勢と竹内の思想に通じるものを感じたのかもしれないが、違和感なく彼らの気概を見ていた。もう一方で彼らと接していた時期は、冷戦後の民族紛争などの影響もあり日本国内では国民国家を相対化する気運が起きていた時期であり、民族「再考」に触れた時期でもあった。そういうわけで私は、同時並行的にベクトルの違う出会いや読書をしていたことになる。さらに同時期の沖縄という土地でもベクトルの違う知的変動（日本の相対化・世界の中の沖縄のようにグローバルな視点を置きつつも、そこに沖縄人という自己完結的な人間像が語られたり、もう一方で首里城復元から少女暴行事件に至る一連の動きの中で人々の意識の中に醸成され伝播されていった沖縄「ナショナリズム」的なもの）も起きていたので、こうした社会の中で、「民族」や「国家」というものを考えていたのであろう。

もっとも先に「ベクトルが違う」と書いたが、沖縄の場合、日本ナショナリズムから離脱し沖縄ナショナリズムへと遷移していく過程と考えれば、それは帰属意識の力点変化であり、「我々」という政治的共同体をつくっていく行為と考えれば同じと言える。

現時点で我が身の思考を振り返り、親ナショナリズムと脱ナショナリズムが同居していた理由を考えると、「良いナショナリズム／悪いナショナリズム」の区分法になじんでいたからかも知れない。その後の私はこうした区分法への違和感というか、「良い／悪い」というナショナリズム評価をめぐる境界線（評価判断）の引き方に関心が向かって

するかのような文章に読みつかれると、私は金子光晴の『マレー蘭印紀行』を読み直したくなる。…（金子の—引用者）視線は、背筋に悪寒が走るほど、研ぎ澄まされている。教養人の甘い限界は、彼の文章のどこにも見いだせない。国家の重みを背負う人々がそこにはいる。ナマコの眼から人々の業を見るのも良い、しかし、人間の眼もいろいろ見ている」（148頁）という文章が印象に残ることになった。学生／院生の頃なので、知識人という自覚はないが、地域研究における対象への向きあいかたを問いかける文章として心に残ったのであろう。このような背景を踏まえて注17を書き連ねたのであるが、当日の議論もフィリピン人エリートのナショナリズムなど、国家や「越境」など自身の思考を再考するうえで知的刺激を得るものであった。

いった。また、“正義の暴走”のように「自己を正しい」と感じる使命感を批判的に省察する方に知的関心が向かい、その思考を考えるようになってきた。もっとも自分自身のナショナリズムに関する立ち位置を述べれば、ラディカルな批判派ではなく懐疑派的態度くらいのものである（ある授業の到達目的にも「ナショナリズムという色眼鏡を調整する能力を身に付ける」と言うように「ナショナリズムの克服」のように大上段では構えないようにしている）。

島嶼研究から見た石原の研究上の意義を述べる小論の最後に身辺雑記風の文章を書き進めたのは、私自身、歴史を思考する際に主語を「私たち」から「私」に力点を動かして考えるようになったからかもしれないが、小論の性格上、島嶼に注ぐ筆者自身の眼差しが、分析道具としてのみ島嶼を見ていないか、私の意見を私たちとすることで、緊張関係を無化しようとしていないか、自己点検する

必要を感じたからであろう。

付表：島嶼研究文献目録

年次	事項 1	事項 2	日本列島近辺の 島嶼研究	日本統治と関連 する島嶼研究	その他島嶼研究
1990 年		鶴見良行『ナマコの眼』（筑摩書房） 『海と列島文化』全 10 巻、別巻（小学館、～1993 年）			
1991 年		今福龍太『クレオール主義』（青土社） →ちくま学芸文庫（2003 年）、水声社（2017 年）で復刊			
1992 年	立法院二二八事件調査研究グループによる事件研究報告書を公表	岩波講座 近代日本と植民地』全 8 巻（～1993 年） 村井紀『南島イデオロギーの発生』（福武書店） 西川長夫『国境の越え方』（筑摩書房）			山中速人『イメージの「楽園」—観光ハワイの文化史』（筑摩書房）
1993 年	海域アジア史研究会発足		南海日日新聞社編『奄美学の水脈』（ロマン書房）		山中速人『ハワイ』（岩波新書） マーシャル・サーリンズ『歴史の島々』（法政大学出版会）
1994 年		歴史学研究会編『国民国家を問う』（青木書店）			
1995 年	戦後 50 年	小熊英二『単一民族神話の起源』（新曜社） →『<日本人>の境界』は 1998 年			
1996 年		子安宣邦『近代知のアルケオロジー』（岩波書店） 『岩波講座 文化人類学』全 13 巻（～1998 年）			

年次	事項 1	事項 2	日本列島近辺の 島嶼研究	日本統治と関連 する島嶼研究	その他島嶼研究
1997 年	独島博物館建設 「太平洋・島サミット」開催 (3年に1度) 国際シンポジウム 「東アジアの冷戦 と国家テロリズム」開始(2002年 5回まで) ポーリン・ハンソンによるワン・ネーション党結成 (オーストラリア)		田中弘之『幕末の小笠原』(中公新書)		山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化』(新曜社)
1998 年	日本島嶼学会設立	『鶴見良行著作集』全 12 巻(～2004年、みすず書房) 太田好信『トランスポジションの思想』(世界文化社)			佐藤幸男編『世界史の中の太平洋』(国際書院)
1999 年		杉島敬志編『土地所有の政治史』(風響社) →太平洋諸島域の土地問題にも言及	菊池勇夫『エトロフ島』(吉川弘文館)		床呂郁哉『越境』(岩波書店)
2000 年	濟州 4・3 特別法公布		テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める』(岩波書店) 原知章『民俗文化の現在』(同成社) →与那国をフィールド、「琉球王国」像をめぐる島嶼間の違いにも言及		
2001 年		小森陽一『ポストコロニアル』(岩波書店)			
2002 年	映画「硫黄島からの手紙」	中山隆司『日本海・軍事緊張』(中公新書・ラクレ)	松下志朗・下野敏見編『鹿児島島の湊と薩南諸島』(街道の日本史シリーズの1冊、吉川弘文館)		遠藤泰生・木村秀雄編『クレオールのかたちーカリブ地域文化研究』(東京大学出版会) 遠藤央『政治空間としてのパラオ』(有信堂)

18 日本における島嶼研究の系譜から石原俊の小笠原群島研究を考える

年次	事項 1	事項 2	日本列島近辺の島嶼研究	日本統治と関連する島嶼研究	その他島嶼研究
2002 年 (続き)			ダニエル・ロング編『小笠原学ことはじめ』(南方新社) →参考文献リストあり、章別に歴史の項目がないのが注目される(石原は第7章社会、第1章は春日匠による民族・文化)		
2003 年		松村劭『海から見た日本の防衛』(PHP新書) →朝鮮半島有事に備え、対馬海峡の戦史に学ぶというスタンス)	西成彦・原毅彦編『複数の沖縄』(人文書院) ロバート・エルドリッジ『奄美返還と日米関係』(南方新社)		早瀬晋三『海域イスラーム社会の歴史』(岩波書店) 浜忠雄『カリブからの問い』(岩波書店)
2004 年	外国人参政権に反対する会全国協議会結成 →2009年頃「外国人が島を奪う」運動が活発化	徐勝編『東アジアの冷戦と国家テロリズム』(御茶の水書房) 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』(御茶の水書房)	下條正男『竹島は日韓どちらのものか』(文春新書)		
2005 年	島根県議会が「竹島の日」制定(2月22日、島根県告示の日) 韓国(馬山市)「対馬の日」制定(6月19日、応永の外寇、馬山浦出發の日) 天皇・皇后のサイパン訪問	本橋哲也『ポストコロニアリズム』(岩波新書)	原貴美恵『サンフランシスコ平和条約の盲点』(溪水社) 「奄美学」刊行委員会編『奄美学—その地平と彼方』(南島新社) 高阪薫・西尾宣明編『南島へ南島から』(和泉書院) 山口遼子『小笠原島クロニクル』(中公新書ラクレ)		
2006 年	2・28事件記念基金会による研究報告書刊行		三木理史『国境の植民地権太』(塙書房)		玄大松『領土ナショナリズムの誕生』(ミネルヴァ書房)

年次	事項 1	事項 2	日本列島近辺の 島嶼研究	日本統治と関連 する島嶼研究	その他島嶼研究
2006 年 (続き)			高橋孝代『境界性 の人類学』(弘文 堂)		
2007 年			日暮高則『沖縄を 狙う中国の野心』 (祥伝社新社) 石原俊『近代日本 と小笠原島』(平 凡社)	山口誠『グアムと 日本人』(岩波書 店)	中原聖乃・竹峰誠 一郎『核時代のマ ーシャル諸島』 (凱風社) 松島泰勝『ミクロ ネシア』(早稲田 大学出版部) 浜忠雄『ハイチの 栄光と苦悩』(刀 水書房)
2008 年	済州 4・3 平和記 念館開館	日本植民地研究会 編『日本植民地研 究の現状と課題』 刊行(樺太は竹野 学、南洋諸島は千 住一) 桃木至朗編『海域 アジア史研究入 門』(岩波書店) 今福龍太『群島一 世界論』(岩波書 店)	ロバート・エルド リッジ『硫黄島と 小笠原をめぐる日 米関係』(南方新 社) 工藤信彦『わが内 なる樺太』(石風 社) 笠原政治『<池間 民族>考』(風響 社)	浅野豊美『南洋群 島と帝国・国際秩 序』(慈学出版)	早瀬晋三『歴史空 間としての海域を 歩く』(法政大学 出版局) 石川登『境界の社 会史』(京都大学 学術出版会)
2009 年	この頃から南沙諸 島問題再活性化 島津の琉球出兵 400 年問題		宮本雅史編『対馬 が危ない』(産経 新聞出版) 黒田智『なぜ対馬 は円く描かれた か』(朝日新聞 社) 下野敏見『南日本 の民俗文化誌』全 12 巻(～2016 年)このシリーズ にはトカラ、屋久 島、種子島、奄美 諸島の民俗文化が 取り上げられてい る		
2010 年	尖閣問題 (海上保安庁衝突 問題、9 月)				赤嶺淳『ナマコを 歩く』(新泉社)

20 日本における島嶼研究の系譜から石原俊の小笠原群島研究を考える

年次	事項 1	事項 2	日本列島近辺の島嶼研究	日本統治と関連する島嶼研究	その他島嶼研究
2010年 (続き)	石垣市「尖閣諸島開拓の日」制定 (1月14日、日本領編入の閣議決定の日)				
2011年	小笠原諸島、世界自然遺産認定 映画「太平洋の奇跡」 八重山の教科書問題	『現代思想』で宮本常一の特集が組まれる(石原も執筆) 石垣直『現代台湾を生きる原住民』(風響社)	知名町教育委員会編『江戸期の奄美諸島』(南方新社) 長谷川亮一『地図から消えた島々』(吉川弘文館)	等松春夫『日本帝国と委任統治』(名古屋大学出版会)	
2012年	尖閣問題(石原東京都知事の買上発言から尖閣国有化まで、4~9月) 南沙・西沙・中沙諸島を管轄する三沙市設置(中国) 李明博韓国大統領の独島上陸 沖縄で第6回太平洋・島サミット開催(この会の後、太平洋諸島学会設立へ)		平岡昭利『アホウドリと「帝国」日本の拡大』(明石書店) 藤岡信勝編『国境の島を発見した日本人の物語』(祥伝社) 『別冊 環』19号「日本の「国境問題」」 坂野徹『フィールドワークの戦後史』(吉川弘文館) →九学会の対馬、奄美を含む		
2013年			村井章介『日本中世境界史論』(岩波書店) 石原俊『<群島>の歴史社会学』(弘文堂) 福原裕二『たけしまに暮らした日本人たち』(風響社) 浦野起央『日本の国境』(三和書籍)		金澤周作編『海のイギリス史』(昭和堂) 中村隆之『カリブー世界論』(人文書院) 黒崎岳大『マーシャル諸島の政治史』(明石書店) J・G・A・ポーク『島々の発見』(名古屋大学出版会、原著2005年)

年次	事項 1	事項 2	日本列島近辺の 島嶼研究	日本統治と関連 する島嶼研究	その他島嶼研究
2013 年 (続き)			富山一郎『流着の 思想』(インパ クト出版) →第 3 章の一部 「国境」は『岩波 講座 近代日本の 文化史』(2002 年) 所収		
2014 年	与那国の自衛隊駐 屯地の建設はじま る。翌 2015 年 2 月に住民投票おこ なわれる		村井章介『境界史 の構想』(敬文 舎) 中山大将『亜寒帯 植民地樺太の移民 社会形成：周縁的 ナショナル・アイ デンティティと植 民地イデオロギ ー』(京都大学学 術出版会) 原井一郎『欲望の 砂糖史』(森話 社) 松尾龍之介『小笠 原諸島をめぐる世 界史』(弦書房)		塩田光喜『太平洋 文明航海記』(明 石書店)
2015 年	天皇・皇后のパラ オ訪問	『地域のなかの軍 隊 7 帝国支配の 最前線植民地』 (吉川弘文館) →南洋は今泉裕美 子、戦争末期の済 州島に言及した論 稿もあり	金子遊『辺境のフ ォークロア』(河 出書房新社) →あとがきで学部 の授業で今福龍太 に出会ったこと について言及 小池康仁『琉球列 島の「密貿易」と 境界線』(森話 社) ロバート・エルド リッジ『尖閣問題 の起源』(名古屋 大学出版会) 永田浩三『奄美の 軌跡』(WAVE 出 版) 喜山壮一『珊瑚礁 の思考』(藤原書 店)	井上亮『忘れられ た島々―「南洋群 島」の現代史』 (平凡新書) 荒井利子『日本を 愛した植民地―南 洋パラオの真実』 (新潮新書)	長島怜央『アメリ カとグアム』(有 信堂)

22 日本における島嶼研究の系譜から石原俊の小笠原群島研究を考える

年次	事項 1	事項 2	日本列島近辺の島嶼研究	日本統治と関連する島嶼研究	その他島嶼研究
2016 年	南シナ海をめぐる仲裁裁判所の判決	吉本隆明『全南島論』（作品社）	池内敏『竹島』（中公新書） 及川高『「宗教」と「無宗教」の近代南島史』（森話社）	キース・L・カマチョ『戦禍を記念する—グアム・サイパンの歴史と記憶』（岩波書店） 三尾裕子ほか『帝国日本の記憶—台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』（慶應義塾大学出版）	黒崎岳大・今泉慎也編『太平洋島嶼地域における国際秩序の変容と再構築』（アジア経済研究所）
2017 年	フィリピン、ミンダナオ島で戒厳令施行	『大原社会問題研究所雑誌』706号→特集が「近現代の対馬における朝鮮人と現地社会」、植民地期や冷戦という時期に注目し「境界」における「支配」のコンフリクトを考察した論考を揃えている 『日本オーラル・ヒストリー研究』13号で保莉実の特集が掲載される	『沖縄県史 各論編 6 沖縄戦』→第 2 部第 2 章「地域の沖縄戦」では久米島・渡名喜島・粟国島、宮古諸島、八重山諸島、大東諸島、奄美諸島の沖縄戦も割り振られている 真崎翔『核密約から沖縄問題へ』（名古屋大学出版会）→タイトルからは分かりづらいが副題の「小笠原返還の政治史」が示すように、小笠原研究の一冊		